

グローバルな感覚を育む機会の創出に向けたアドバイザリーボード(第2回)議事録
3月27日(金)10時00分から11時00分まで

(田中室長)

ただいまより、グローバルな感覚を育む機会の創出に向けたアドバイザリーボードの第2回会議を開催させていただきます。

本日はご多用の中、ご参加いただきましてありがとうございます。東京都子供政策連携室長の田中でございます。今回は全委員のご出席をいただいております。藤田委員、林委員、アブディン委員につきましては、オンラインでのご参加となっております。

それでは、ここからの進行につきましては、秋田座長にお願いしたいと思います。よろしくお願いいたします。

(秋田座長)

ありがとうございます。それでは、今後の進行につきましては、私の方で務めさせていただきたいと思えます。

本日のテーマは、幼児期にふさわしい国際感覚を育むための体験・経験でございます。まず、事務局からご説明をお願いいたします。

(山本部長)

はい、それでは事務局から説明させていただきます。

資料の方ですが、まず幼稚園や保育所等における基本的な考え方でございます。幼稚園教育要領や保育所保育指針等では、教育や保育は環境を通して行うこと、また、遊びを通して行うことを基本としております。

次に、幼稚園教育要領等における幼稚園や保育所での「日本文化や異なる文化に触れる活動」についてでございます。我が国の伝統的な行事や伝統的な遊びに親しんだり、異なる文化に触れる活動に親しんだりすることを通じて、国際理解の意識の芽生えなどが養われるようにすることとされております。こちらは各要領等の解説の内容でございます。

最後の段落のところでございますが、文化や伝統に関係する地域の人材等との連携協力を通して、異なる文化にも触れながら、幼児の体験が豊かになることが大切とされております。

次に、幼稚園や保育所等におけます取り組みの状況でございます。都内の園におけます特徴的な事例をお示ししてございます。この中で、「日本の伝統的な行事や遊び等に親しむ」では、七夕や節分、正月などの季節の行事のほか、こまや凧揚げ等の伝統的な遊びなどに親しむ様子がうかがえました。

また、「異なる文化に触れる活動等に親しむ」では、外国の文化を題材にした物語を聞く、地球儀や地図などを使って外国に親しむ、外国語で挨拶をする、歌を歌う、音楽を聴くといった活動に親しむ様子がうかがえております。

こちらは、「異なる文化に触れる活動等の取組例」についての詳細でございます。絵本や地球儀、写真、人形、民族衣装といった素材を活用した取組のほか、食に触れる、あるいは行事やイベントを活用して親しむ、さらにはオンラインを活用した交流を行うといった事例がございました。

最後に、幼児期における今後の取組の方向性等の検討に向けた論点でございます。本日4点お示しをさせていただきます。

1 点目が、幼児期においてはどのような視点を持って取り組むと良いか。

2 点目が、本年秋頃から実施することを予定しております、幼稚園や保育所等での実地調査を行うにあたり、子供の興味関心を効果的に引き出すための取組や工夫としてどのようなことが考えられるか。

3 点目が、実地調査では、幼児教育保育の運営主体、東京の特徴、地域性や活用すべき資源を踏まえて、どのような点に留意して行うと良いか。

4 点目が、実地調査では対象年齢を何歳とするのか良いか、また、発達段階に応じた工夫としてどのようなことが考えられるかでございます。

これらの4点につきまして、本日、委員の皆様からご意見を頂戴できればと考えてございます。事務局からの説明は以上でございます。

(秋田座長)

山本部長、ご説明どうもありがとうございます。それでは続きまして、プレゼンターによる発表に移りたいと思えます。

本日は内田委員にご発表をいただきたいと思います。それでは内田委員、よろしくお願いいたします。

(内田委員)

はい、よろしくお願いいたします。今日は「幼児期にふさわしい国際感覚を育むための体験・経験」と題してお話をさせていただきたいと思います。

幼児期からグローバルな感覚ということを考えるにあたって、誰しも頭に浮かぶのが、幼児期からだとも早すぎるんじゃないかということだろうと思うんですね。ただ、私はここではグローバルな感覚というのは包括的なものであって、実際、乳幼児期の子供たちは毎日身の回りの世界に出会って、その世界と関わって楽しんで学んでいて、その向こうのつながっている先にグローバルな世界っていうのはいつもそこにあるのであって、世界との出会いをグローバルかどうかで区切って考えるのは難しいと思っています。

グローバルな感覚っていうのは教え込むものではなくて、気づきの中から身につけていくものであります。ですから、この幼児期の物事の様々な性質の違いを認知して、言語と結びつけて理解していく。この時期には、自然に互いの共通点と違いを発達に応じて理解していくことができると思っています。

幼児期に気づいてほしいグローバルな感覚というのは、こんなことではないかなということをリストにしてみました。例えば、家族とは異なる、色々な人がいること。それから自分について知っていくこと。異なる相手と出会うと、それによって自分がどういう人間であるか、どういう人であるかということがわかっていくと思うんですね。その異なる相手との背景となる文化に触れる。そのためには、色々な人に出会っていくところで、園などの存在というのはとても重要だと思っています。そして、より広い世界の存在を感じて、新しいことに好奇心や関心を持っていく、新しいことに会おう経験をしているということが大事だと思っています。

その時に一緒に面白がってくれる大人や仲間が近くにいるということも大事だと思っています。その仲間が色々な人であるということに気づいてほしいと思っています。そうしますと、それを支えていく保育者はどうかということになるんですけども、OECD の国際調査が 2018 年とそれから 2024 年にされていて、今日日本語訳は国立教育政策研究所から出ている 2018 年のものがあるのですが、そこで保育者や、それから施設長、園長の回答を見ると、言語的文化的多様性に関わる研修等で学ぶ機会が少ないとか対応方法に自信がないと感じている保育者の割合が比較すると多めということが出ています。この場合、自信がないと感じているのは、それだけ課題に気づいているということの裏返しでもありますので、必ずしも否定的なことばかりではないんですけれども、ただもう少し学びたいと思っている保育者が多いというように私は捉えています。

言語や文化が異なると、子供との関わりにどうしても難しさを感じる可能性が高いわけですけども、私自身が調査したり、他の方も調査しているものがあるんですけども、養成研修、教育や研修をしましょうとなった時に、今度それを提供できる人材もまだ日本では少ないということがあります。ということは、大人自身の経験が少ない場合、良い取り組みから互いに学ぶ機会というのが大事になってくると考えられます。私自身、色々な園にお邪魔したりしながら調査をしているので、比較的最近の自分の記録から事例をいくつか拾ってみたのが次の 3 つのスライドです。

例えばパラリンピックを、パラリンピックをテレビで見たある園の 4 歳児さんたちが「オリンピック見た？」って、「椅子に座ってスキーすごかった」って話をし、この 3 人かみ合わないんですね。「イタリアでやってるんだよ」って。「それに椅子に座って滑るの」って言って、椅子に座って滑るってことは自分の座ってる椅子を見たりするわけです。で、最初の子は「こうやって座って、ここに滑るのがついて」って、もう頭の中はその世界なので話しているわけですけど、B 児はその場所が気になるので「コルティナ」って言ってたんですけど、「コルティナってイタリアなんだよ」って。

この 3 人それぞれのパラリンピックとの出会い方を、担任が集まりの時にこの会話を取り上げて、「こんなことを考えていた人たちがいたよ」ということで、まだ興味関心のない子にもちょっとつなげてあげたり、この子たちに考えていたことを確かめる機会を与える。すごいなと思ったのが、新聞が用意してあって、新聞記事が魔法のように出てきました。だから保育者がもしかしたらという可能性を予測してた。スキー競技のことは特に用意しなかったもので、みんなで知っていることを出し合ったりとか、地球儀が部屋にあるので、イタリア探しをそれでしたりということをされていました。そんな事例です。

それから、世界にはいろいろな言語があるらしいということをお子さんが感じていた事例なんですけども、これも 4 歳児の年中さんのクラスですが、行った時に「ねえ僕韓国語しゃべれるよ」と言って私に近づいてきたお子さんがいらしたんです。「そうなんだ。すごいね。韓国語か」。と返事をしながら私は一生懸命考えて、「一つ私も言えることがあるよ。アニョハセヨ・・・で合ってる？」って聞いたら「合ってます」って言ってもらえたんですね。そしたらそれを見ていたほかの子が「私も韓国語を言える。アンニョン」って、その子に他の子に教えてもらったって言うんです。で、また H ちゃんっていう子が近づいてきて、「私、日本語とタイ語言えるよ」って。何が起きてるんだろうと思ったら、後で担任に聞いたら、「A さんは韓国ルーツを持つお子さんで、少し前に韓国語を話す方が園見学にいらした時に、今やっている活動について韓国語で説明してくれた」と。それを見ていた他の子たちが「知りたい」と言って、この F さんとか G さんは教えてもらって覚えていた。

先生たちもそれを「誇らしかった」とおっしゃっていて。タイ語は「少し前に地域のタイの方にお祭りの話をしに来てもらった」と。その時にみんなでタイ語を習った、それを言えることがみんな誇らしいという経験をしている園のお話です。

それから事例の 3 はですね、これは少し前に体験したことです。年長さんのクラスで覚え始めた歌を歌っていて、歌詞の中に、よく日本の子たちが普通に歌っている歌ですけど、ワンツースリーフォーとかって数えるところがあるわけです。英語で数える部分があった時に、中国語でも数えて歌う子供たちがいたんですね。自分から。で、担任が気がついて、「英語以外で数え方知っている人いますか？歌えるかもしれないから教えてほしいな。」と言うと、中国ルーツのお子さんだったと思うんですけども、10 まで数えてくれました。他の子たちが真似て練習していると、その部分をもう一回歌う時に中国語に歌詞を変えて歌いました。そうすると、子供の方から他の子に「ネパールはなんていうの？」って。ネパールルーツのお子さんで、ちょっと民族的な柄のものを着ていらしたから多分そうだろうと思っているんですけど、数え始めたんですけど分からなくなってママに聞くなってしまったんですね。で、「なんでわからないの？」って他の子に責められて、それはかわいそうだということで、担任の先生が「今思い出せないからママに聞いてきてくれるそうです」とアナウンスをしたんですが、そうすると他のネパールルーツの子がわかる範囲まで言ってくれて。でも最初の M ちゃんは「ママに聞いてくるの」って、「もっと数えるようになりたい」っていうきっかけになって、うちへ帰っていったということです。このクラスはとても外国ルーツの子が多いクラスだったんですけど、その数え歌の中で他の子の言葉も取り上げたということもあるんですけど、色々なことがあるのだからっていうことを、歌を歌っていて自然に体験する。実際、英語って自然に子供たちって体験したりもするのだからということも感じました。

こんな事例のように、身近なことからグローバルな感覚というのは育めるものではないと思います。その時に、まずは日本人の中にある様々な生活様式とか、様々な環境の中で自分たちの生活が成り立っているという感覚をまず持っていく。グローバルっていうことにこだわらないで、色々な人がいるっていうことを体験していくことが大事だと思います。

地域の人に園に訪問してもらってお話を聞く。別にさっきタイの方だったんですけど、タイの方、外国の方だけである必要はなくて、色々な方、親じゃない、先生じゃない人から話を聞く。それから、保護者の協力を得て、色々な体験や仕事や生活を紹介してもらう。その上で、日本の中にもそうしていると、多様な文化や言語があることを子供たちは気がついていくと思います。私自身も気をつけないと方言が出てしまうのですが、言葉の違いって色々あります。

それから、図書館に行くといろいろな言語に自然に接することができます。そういう場所に子供たちが行ってみる機会を地域として、園として提供できる。それから、いろいろな郷土料理や遊びの違いや習慣の違いがあって、それを自然に取り入れて、もうすでにやっていることをちょっと意識していただいて、「これは東北の遊びなんだよ」とか、「これは九州の遊びなんだよ」とか、色々な遊びがあって、この間会った人にこういうふうに教えてもらったよっていうことを紹介してすればいい。その延長線上に、世界にも色々な言語があって、色々な文字があるということを知っていけるといいと思います。

これが最後ですけども、まとめです。幼児期だからこそ、どのように異文化と出会うかというのは大切に考える必要があると思います。そうすると、周囲の大人の役割がとても大切になります。機会を作るとのことと、機会があった時に、子供がどのようにその状況や体験を理解しているかということをよく見て受け止めて、そしてその結果として、その経験を通して自分の違いに気づき、身近な違いに気づいて、自分のことを知って、自分に誇りを持って生きていけるという基盤が作れていくのではないかと思います。

そして、違うことを大事にする環境というのは、それは人を思いやる気持ちや自分を大事にする気持ちにつながると思っています。ですから、大切に考えていければと思います。

以上です。

(秋田座長)

内田委員、大変示唆深いお話をありがとうございました。

それではですね、意見交換に入りたいと思います。事務局より説明がございました 4 つの論点につきまして、内田委員のご発表や事務局の資料なども踏まえて、各委員からですね、ご発言をいただきたいと思います。順に、お一人 5 分ほどまとめてですね、今回は何順かではなく、1 順でお一人 5 分ずつ程度を目安にご発表を、ご発言をいただきたいと存じます。

今回は柴山委員からご意見をお伺いし、順にアブディン委員、林委員、荻野委員、サコ委員、藤田委員、内田委員という形でご発言をいただく予定になってございます。

それでは柴山委員からお願いをいたします。

(柴山委員)

はい、よろしくお願いいたします。

では、まず論点1についてですが、乳幼児期は一生のうちで最も可塑性のある時期という発達的な視点を持つことが大事だと思います。すなわち、保育者の働きかけや保育者が構成する活動でどのような経験をすることによって、その後の発達を基礎づけるような教育効果が期待できると考えられるからです。第1回会議で議論した「世界を舞台に活躍する上で求められるグローバルな素養」の一つとして、多様な文化や言語の人々がいて当然という感覚や、それを受け入れる感覚を培うことが重要という指摘が出されていました。文化というのは、物的なものから生活習慣、人間関係の在り方、価値観まで幅広いものを含む概念ですが、保育所や幼稚園などの機関での取り組みを考えるならば、幼児にとって身近なものや活動の中で別のやり方もあるんだ、違うけど面白いなといった日常の保育に埋め込む形で違いを楽しめるという視点で取組を考えていくのが良いのではないかと思います。例えば、同じお話を日本語と別の言語で読み聞かせるとか、同じ歌を日本語と別の言語で歌うなどです。同じお話が別の言語でも書かれた絵本を見せることができれば、文字という視覚的な違いにも触れることができます。つまり、同じ活動に別の手段があることへの気づきを育んでおくことは、多様な文化や言語を楽しみ、受け入れる上での土壌になるように思われます。

論点2についてですが、幼児が受け身的な立場にならずに、能動的に参加できるような工夫があると良いのではないかと思います。幼児期の自発的な活動としての遊びは、発達の基礎を培う重要な学習であることを考えますと、幼児自身が主体的に観察したり、模倣したり、試したりできるなど、能動的に取り組むことができると、違うことを面白く感じる感覚を育てていけるのではないかと思います。活動の手法としては、異なる文化的背景を持つ人々との交流活動や、一緒に何かをやる体験活動ができれば、直接接触できますので有効だと思います。また、事情が許すようであれば、単発ではなく月に一回など定期的に行うと良いかと思います。また、そうした活動で絵本やおもちゃなどを用いた場合には、その後も保育者や幼児が日常的に触れられる場所において、自由に使えるように、その使い方とか運用の仕方も蓄積していくと良いのではないかと思います。また、実地調査を行う場合には、園の数だけではなく、地域性も考慮して行ってはどうかと思います。東京都といえども、23区内、多摩地域、島しょ部があり、地域性も多様であると思いますので、幅広く試行を行って感触をみていくと良いかと思います。

論点3については、東京都の特徴を生かした実地調査を行う際に、二つの点に留意していただけると良いかと思います。一つは保育所、幼稚園、認定こども園があり、また公立私立と運営主体も規模も多様です。その違いを幅広くカバーすると良いと思います。もう一つは、先ほど申し上げた地域性への留意です。地域性には地理的なものだけではなく、活用可能な人的資源や言語資源なども含まれますが、これらの条件も考慮して実施対象園を選定していただけると良いのではないかと思います。

最後の論点4ですが、発達段階に応じた工夫をする上で、アメリカの幼児を対象とした研究が一つの参考になるかもしれません。それによると、1歳から3歳といった幼い時期から、肌の色、髪の色、言葉の違い、性別など人を色々なレベルで認識し始めると言われており、3歳になると、特に自分とは違った特徴を持つ相手に恐れを示すようになるという知見があります。これは内集団偏見と呼ばれているもので、自分の価値を守るために、自分が馴染んでいる内集団よりも、よく知らない外集団を否定的に見なすという傾向を言います。こうした内集団偏見の傾向は、3歳頃から見られると言われています。

この知見を参考にすれば、3歳の初め頃から、馴染みのないものにも関心を広げていけるような支援をしていくと良いのではないかと思います。また、日本の保育機関での取り組みを考える場合には、アメリカとは違った文脈もありますので、その点も考慮する必要があると思います。アメリカの保育機関では目に見える違いがたくさんあります。日本にもそれはありますが、一見見た目は自分と変わらない子供が別の言葉を話すということもあります。これは私自身の研究で気がついたことですが、ある4歳児の園児が、見た目が自分と近い東アジア出身の転入児がどうして先生の言うことを聞かないんだと怒っていたのですが、その子が別の言葉を話す子供で日本語がわからないことをまだ理解できなかったんですね。

ですので、外見的な違いが小さい子供との接触や交流においては、子供に限りませんが、配慮すべき点の一つになるかと思います。また、3歳児以上になりますと、会話力も出てきて、言葉への関心も高くなってきますので、先ほどの内田先生の事例にあるような、歌の中に出てくる数をいろいろな国の言葉で言ってみるとか、ほかにも色々な国のことば遊びとかじゃんけんの仕方を紹介し合うというのもとても良いと思います。

また、日本語以外の言語資源を持っている子供が活躍できるような機会を与えて、その子の言語資源をみんなで共有して楽しむというような、幼児が能動的に参加できるような活動を工夫すると良いのではないかと思います。

以上です。

(秋田座長)

はい、柴山委員ありがとうございます。それではちょっと順番を変えさせていただきまして、続きまして林委員、お願いをいたします。急に振りましてすみません。

(林委員)

ありがとうございます。お願いいたします。今日オンラインで申し訳ありませんが、どうぞよろしくお願いいたします。外資系の金融機関にしか勤めたことがないのですが、あとは国際的な組織のボードメンバーを務めて、海外に暮らしたことも一回もないんですけれども、今回のお役目は、日本でずっと暮らしていても、なんとなくグローバルなところでも活動ができるという経験を皆様と共有できたらいいなというふうに思っています。

早速ですけれども、まず一点目の一番最初に、本日の内田先生のお話は本当に共感することばかりで、グローバルってどういうことって包括的なものなのだということが、私も外資系でずっと働いていて思ったんですが、英語が喋れるとか、海外に暮らしたことがあるというよりは、違う人たちといかに心の障壁なく付き合えるかっていうことが、本当に国際的な人材なのではないかというふうにずっと考えていたので、そういう意味では外国人であろうと日本人であろうと、立場が違う人たちであろうと、そういう人たちを受け入れるような人たちが育っていけばいいなという風に心の底から思っております。

まず、幼児期においてどのような視点を持って取り組むといいかということですが、これも柴山先生や内田先生がおっしゃった通り、違いがある人たちが世の中にいるんだと。ややもすると幼稚園とか保育園などで、本当に狭い世界だけが世の中だというふうに、もしかしたら思ってしまう可能性もあって、ましてや今親御さんたちとても忙しいので、できるだけ幅広い視点を持てるような環境を作るということ。

それは今日のお話にもありましたけれども、遊びと環境を充実しても、まさにその通りで、楽しくどうやってそういうものを学ぶとか、感じていただく機会を作るかということではないかと思っています。で、我が社でも本当に小さいお子さんから高校生ぐらいまでですね、社員の子供たちを連れてきて、交わる機会を何回も持っているんですけど、本当にその言葉ができようと思えまいと、フェスの中でお祭りをやったり、ハロウィンをやったり、金魚すくいやったりとか、それから民族衣装を着て集まってもらったりとか、それは子供も大人も混ざってやるということで、我が社 35 カ国の社員が働いておりますので、そういう人たちがさりげなく交わる、交わって楽しめるようなことってというのがとても大事なんじゃないかと考えております。

どうしてもその教育の話って、個人の体験に基づくことを私も含めて素人が語ってしまうのですが、私自身も子供の時に近所にあった教会に通ったとか、セサミストリートをなぜか見ていたとか、そういうことから日本と違う世界があるんだということを学んでいるような気がしますし、教会に行ったら何が楽しかったかって、おやつとカードがもらえるっていう、それだけだったんですけど、それで海外の文化に触れたというのが、今の私の仕事にもつながっているような気がしております。

二つ目も今まさに申し上げたことと重なりますけれども、色々な人たちと触れ合う。それはお祭りであったり、本であったり、それから今 YouTube とかオンラインでいくらかでも触れる機会があるので、気軽にみんなが楽しめるものを提供するというのが大事なんじゃないかと思っています。

先日東京都さんの英語のスピーチコンテストに審査員として参加させていただいたんですけど、その時に高校生の提案で、英語は試験に受かるためのツールみたいなのがアンケートでとても多かったというのを、発表を聞いていて「試験に受かるためなんて。本人が誰かと喋るためだよ」って私も思っているんですけど、そのように子供たちが英語でも中国語でも何語でもいいですけども、日本語以外の世界もあるんだということも遊びの中で学べたらいいかなと思います。

ちなみにこれも私の個人的経験としてなんですが、昨日、20 代の若者と大人、年取った人のセッションというのが常にあるんですけども、ものすごい日本語の上手い台湾の子がいて、「日本に住んだの？」って言ったら「一回も住んだことない」と。「どうやって日本語を勉強したの？」って言ったら、「高校生ぐらいの時に嵐が好きになって、嵐の歌と嵐のドラマをひたすら見続けたら日本語が喋れるようになった」って言うので、何か好きなこととか面白いことにつながるようなものであればいいのではないかというふうに思っています。

4 つ目の点についても皆様おっしゃられた通りですが、本当に東京は広くて、私がいるような日本橋近辺のオフィスのところから島しょ部とか、山間部とかいろいろあるので、一律にやるということはないのだろうというふうに思っています。それとあと、東京の中でも、私もボランティア活動で中学とか高校で色々な勉強を教える機会を持っていますが、東京の中でも、地域の環境によって、与えられている環境が違うなというふうに思っています。そういったことも視野に入れて、まさに多様性を主にした対応が必要になるのではないかというふうに思っていますけれども、特に小さいうちには、そこに大きな差がまだ出てないという前提で、幅広い視点で実地調査をしていただければというふうに思っています。ちなみに経済同友会でも子供と触れ

合う機会がとても多いのですが、島しょ部ですとか、地方の方は全部オンラインで色々な授業を行ったりしており、今新しいデバイスがあるので、色々な工夫ができるのではないかなというふうにも思っています。

最後の対象年齢のところについては、私は教育の専門家ではないので、ここでコメントすることは避けたいと思っています。どのような資源を使ってということについては、インターナショナルスクールも結構東京にございまして、日本人の子供も結構行っていると聞いていますけれども、それも貴重な様々なリソースだというふうに思いますので、そういうところともうまく連携できたらいいのではないかなと思います。

最後になりますけれども、学校の先生方とよくお話する機会があるのですけれども、タブレット教育やっください、英語教育やっください、新しい教育やっくださいといって、学校現場が本当に疲弊しているというお話を伺っております。なので、今回の取り組みはとても大事だと思うのですが、保育者の負担ですとか、保護者の方の負担をできるだけ減らして、かつその方たちも同じような視点を学べるような、そんなものであったらいいかなというふうにも思っております。

以上です。

(秋田座長)

林委員、大変貴重なご発言をいただきまして、誠にありがとうございます。それでは続きまして、荻野委員、お願いをいたします。

(荻野委員)

はい。それではですね、まずどのような視点を持って取り組むとよいかという点ですけれども、今様々な取組がなされているというお話がございました。方向性としてはですね、そういった方向性で私もよろしいかなと思っているんですけれども、ややネガティブなものの見方をしますと、逆にどういたことがそういった取組を阻害しやすいのかというところの配慮も必要なというふうに思います。

実は全く個人的な体験で恐縮なんですけど、私、神奈川県横須賀で生まれ育ちまして、実は小さい時から、近所には外国人の、特に米軍関係のお子さんがですね、まさに同い年で住んでおりまして、一緒に野球やったり、それからオープンハウスの時には米軍基地の方に入ったりさせてもらって、ある意味、期せずして異文化体験ができたわけです。けれども、逆に、そういった取組、そういった体験に出ていく友達と全く出て行かない友達がいてね、やっぱり出て行く方がポジティブに捉えていて、出て行かない方がネガティブと捉えているとするならば、阻害する要因って何なんだろうなって。これ、いまだに解けてないんですけど、逆にどういう視点を持たない方がいいのかという、そういったところも、ちょっとやや穿った見方ですけども、必要かなんて思いました。

それから、子供の興味関心を引き出すための取組・工夫、これは「自分ができてから他を」という順番じゃないような気がするんですね。同時進行していて、その中でアイデンティティというものが作られていくというように、そういうイメージで捉えた方がよろしいんじゃないかなと。つまり自分は家庭があって、地域があるわけですね。そこで色々な人と触れ合っていく中で、いろいろ一緒くたになっていく、まさに包括的なものの中で、自と他の区別というのができていくということを考えますと、もうできれば直に体験させる、異文化と直に体験させるということも含めて、あまり前後関係、順番は気にすることないじゃないかなというふうには思うんですね。

実は私、さっきの話、個人的な話からしましたけど、例えば、スポーツとか、歌だとか、あるいは東京ですと災害とか、それから外国人に人気のあるアニメとか、共通のトピックスは結構あると思うんですね。そういったところは共通に、いわゆるアクティビティが組みやすいところじゃないかなというふうに思いますので、そのような興味関心を引き起こすようなものを共通のトピックスに据えて、そしてもう一緒くたに色々なことをやると。言葉のバリアはあると思いますけれども、やるというところが重要じゃないかなというふうに思います。

私、もう 20 年以上前ですけど、英語の教員だったんですけども、島を含めいくつかの学校に勤務したことがございます。「この子ヒアリングすごいな。英語の教員が聞き取れない言葉でも聞き取れているな。」と思ったのは、実は島の生徒でしてね。洋楽が好きで、いつも洋楽を聴いていたと。それから今、逆に南アジアから生徒さんをたくさん預かっていますけども、日本語がうまい子は大概アニメが好きですね。とってもヒアリングがいいです。つまり地域はもちろんありますけども、興味関心を持たせること、それを中心に活動する、組織的に、あるいは個人的に、色々なチャンネルで活動させるということがとても重要なことだと思います。そこで子供の能力はグッと深まっていく、育っていくと、そんな印象を受けています。

ただ、やはり東京、先ほど柴山委員からもありましたように、広いですから、それは外国人がたくさん住んでいる地域と、ほとんど見かけない地域があると思います。そういった意味では、調査などをされる場合には、そのような地域的な資源がかなり偏在していることを考慮に入れながら、逆にあまり外国人と触れ合うチャンスのないところでも、島で出会った生徒のように国際理解の素養を持った子が育つのだということを前提に、

広範に調査をされた方がいいんじゃないかなというふうに思います。

最後の対象年齢のところ、これにつきましても、私は専門家ではありませんけれども、学校教育に長く携わってきた人間とすると、やはり、幼稚園、小学校、中学校という区分が、どこまで絶対的なものかはわかりませんけれども、やっぱりそういったコミュニティが今あるということは、やっぱりそこで一区切りですね、子供たちの興味関心も変わってくるのかなと。

実は私の友人で、見た目、日本人そっくりですが、国籍がアジアの某国の小学校の低学年のお子さんをお持ちの方がいます。どうもその子は自分の国籍はなるべく明らかにしてほしくないようです。いじられたりいじめられりすることを恐れているようです。一緒に生活し学ぶ中で、キャッキャできる年齢というのか、キヤラというのかよくわかりませんが、そういう時期もあり、逆に国籍を言うことによって、いろいろ注目を浴びたり、注目を浴びたことがややネガティブに動いたときに、いじりやいじめになることもあって、そこはややブレーキ踏むような、そういった時期っていうのもきっとあるんだろうなって、ちょっと感覚的に思っているのですけど、専門家の方いらっしゃるのをお聞きしたいんですけども、そういった部分もあるので、ちょっとやっぱりカテゴリー分けみたいなのが必要かなという印象を受けております。

私からは以上です。

(秋田座長)

荻野委員、どうもありがとうございます。それでは続きまして、サコ委員、お願いいたします。

(サコ委員)

まず、私たちの世代と、今の幼児期の子供たちとでは、世界観つまり世界の捉え方がそもそも違っているのではないかと思います。今の子供たちは、生まれた時から世界がすでにグローバル化している環境の中にいます。つまり、彼らにとってはグローバルであることが前提になっているのです。したがって重要なのは、その感覚をどのように意識化していくかという点だと思います。子供たちは、いわば「無意識のグローバル」の中にいる。その無意識の感覚を、教育や保育の場でどのように自覚的なものにしていくかが問われているのではないのでしょうか。先ほどのお話にもありましたが、その際に重要になるのが文化的多様性です。カルチャー・ダイバーシティをどのように重視し、学びの中に位置づけていくかが大切だと思います。

荻野委員もお話されていましたが、自文化と異文化をどのように捉えるか、そこにある同質性や差異をどのように理解するかという視点が重要です。特に私は、その「差異を楽しむ」ことが非常に大事なポイントではないかと思います。

文化について考えるとき、よく言われることですが、オランダの学者ホフステードも述べているように、文化とは学習の結果であると考えられます。つまり、文化は学習によって身につけることができるし、理解することもできるものです。だからこそ、私たちはその学習環境をどのように充実させるかを考える必要があります。自分の文化にしっかり触れながら、同時に異文化にも触れていく環境を整えることが、非常に重要だと思います。

幼児期の子供たちは、まだ文化というものを明確に区別して理解しているわけではありません。自分の身近な環境の中にさまざまな文化があり、いわば文化のネットワークの中で生活しています。その中で、いろいろな違いを楽しめるようにしていくことが大切です。先ほど内田先生のお話にもありましたが、かなり早い段階から子供たちは自分のアイデンティティを形成し始めます。「自分はこうで、他の人はこうで、そこに違いがあるから面白い」と感じられるようになることが重要です。ある社会学者も述べているように、まずは自分の足元をしっかり学ぶことが大切です。

これは学校だけでなく、家庭においても同じです。家庭では、それぞれの子供が自分のアイデンティティの基礎を学びます。そして学校や保育の場に来たときに、違う文化に出会い、その差異を楽しむ。そのように差異を楽しめるような指導や環境づくりが、非常に重要ではないかと思います。

私自身も、保育園や幼稚園、小学校などを訪問する機会がありますが、子供たちにとって最も印象に残るのは、やはり遊びです。異文化の人と一緒に遊ぶことで、子供たちはさまざまな違いに自然に気づき、その違いを楽しむようになります。私自身がよく使っている方法として、クイズ形式があります。有効かどうかはわかりませんが、子供たちに結構ふざけたクイズを出すこともあります。あえて日本では考えにくいものを紹介したり、逆に「実は日本にも同じようなものがあるよね」と示したりします。

このように、同質性と差異を組み合わせることで、子供たちの印象に残りやすくなると思います。大切なのは、子供たち自身に気づいてもらうことです。違いを知識として教えるだけではなく、自分で気づき、面白いと感じられるようにすることが重要だと思います。

また、もし皆さんが実地調査をされるのであれば、最も有効なのは行動観察ではないかと思います。長く話を聞くことも大切ですが、子供の行動を観察することで、その子供の背景にある家庭環境や文化的環境が

見えてくることがあります。例えば、ある行動をしている子供について、「この子にはこういう家庭環境があるのではないか」と考えることができます。その意味で、家庭環境と保育園の環境の組み合わせの中で、子供のグローバルな感覚は育まれていくのではないかと思います。

最後に、東京都について考えると、東京は非常に広く、外国人も多く暮らしています。これは大きな資源だと思います。もう一つ考えていただきたいのは、日本に來ている外国人にとっても、ここはグローバル化された異文化の場であるということです。彼らもまた、日本という異文化とどのように触れ合うかについて悩んでいます。一方で、私たちも彼らの異文化とどのように触れ合うかを考えている。そこには、実は「お互い様」の関係があると思います。

外国人の方々も、もっと日本人と親しくなりたい、自分たちにとっての当たり前と日本人にとっての当たり前の違いを、お互いに伝え合いたいという思いを持っているのではないのでしょうか。

この資源をどのように活用するかが重要です。留学生もそうですし、働きに來ている人たち、地域に暮らしている外国人の方々もそうです。そうした人たちを教育や保育の場に積極的に取り入れていくことは、とても有効だと思います。特に、子育てをしている外国人のお母さんたちの中には、自分の国でも子育てを経験したことがない人も多いわけですから。そうした方々は、日本社会の中で子育てをしながら、この社会の文化を学んでいます。ですから、外国人に対しても学習の機会を増やしていくことで、お互いに見えてくるものがあるのではないかと思います。

年齢については、先ほど専門的なお話もありましたが、私自身は非常に小さい子供たち、例えば保育園の子供たちと接する経験がかなりあります。2歳児であっても、だんだんいろいろなものを覚えていきますし、感覚はしっかり育っていると思います。

一つ事例を挙げますと、私が保育園に行くと、子供たちからよく「どのぐらい？」と聞かれることがあります。最初は、「何をどのぐらいと言っているのだろう」と分からなかったのですが、実はその背景には、「お母さんが、顔を洗わないと黒くなると言っていた」という話がありました。つまり、子供たちは私を見て、「どのぐらい洗わなければ、そうなるのか」と関心を持っていたのです。そこで私は、大人として「2か月」と答えたのですが、すると保育園中で「2か月」が一つの基準のようになってしまいました。これは冗談のような話ですが、子供たちはそれほど強い関心を持っているということです。「なぜあなたは違うのか」という問いを、子供たちは自然に持っています。そこをうまくコミュニケーションしながら、違いを感じてもらうことは非常に面白いし、大切なことだと思います。

ですから、年齢が低くても、子供たちの感覚は十分に養われていくと思います。ぜひ、その点を意識していただきたいと思います。

最後に、繰り返しになりますが、グローバルな感覚は、子供たちの中にすでにあるのかもしれませんが。大切なのは、それをどのように意識化していくかです。教育や保育の中では、この「意識化」に少し重点を置いて考えていく必要があるのではないかと思います。

以上です。

(秋田座長)

サコ委員、ありがとうございます。それでは続きまして、藤田委員お願いをいたします。

(藤田委員)

よろしくお願ひいたします。もうすでに他の委員の先生方が本当に多岐にわたって意見を述べていただいて、かなりそことオーバーラップする部分もあるのかなと思いながら、皆さんのお話を聞いていましたし、最初の内田委員のこの発表に関しても、本当に同意することばかりというようなことでした。

まず最初にこの視点の話なんですけれども、これもすでにもう皆さんお話した通り、この年齢層の子たちを考えた場合に、とにかく体験を通して学ぶということがとにかく大事であって、当然座学とかそういう話ではないですよということになると思うんですね。そしてそこで実際色々な多様なものに触れたりとか、多様な人々に出会ったりっていうような体験の意義付けというのは、後の振り返りでいいと思うんですね。その段階では、特に「これしたからこういうふうな効果が出る」みたいなことを、今、サコ委員の方からこの意識付けという話がありましたけど、その段階で必ずしも意識はしてなくても僕はいいのかなと思っていて。後から振り返り、何年後に後にかもうちょっと大きくなってから、「あの時、ああだったかな」というところがわかればいいかなと思います。なので、あまりそこで、効果というか結果みたいなものを早急に求めすぎずに、とにかくでき得る限り様々な体験をさせてあげることが、ひょっとすると大事なんじゃないかなというふうに考えています。

そこを引き出すにあたって、とにかく今言ったように色々な人と触れたりすることが大切です。地域差の話も今まで何度も出てきていますけれども、場合によっては本当に都内の大使館とかがたくさんあるような地

域であったりすれば、比較的容易に様々な国の人と触れる機会があるかもしれない。あるいは米軍基地の話もさっきちょっと出てきたと思いますけど、そういうものがある地域と、場合によってはそのものから離れているような場所も当然あるので、このような取り組みを考えている時に、逆にその辺の差をあまりできるだけ縮めていくために、これは前回の会議の際にもちょっと言いましたけど、例えば様々な大学に留学生が来ていたりすることを活用する。その大学っていうのは別に 1 箇所に固まってるわけじゃなくて、結構都内のあちこちにあったりするので、そういうところの学生さん、留学生とかとの交流みたいなものも含めて考えていくことによって、その体験的な機会をできるだけ多くのお子さんたちに与えていくっていうようなことにつながれるんじゃないかなと思っています。

それから、異文化体験を考えた時に、これもすでにあの委員の先生方にすでにお話ししていたと思うんですけども、この異文化って言った時に、必ずしも異国籍であったりする必要ありません。内田委員の発表の最後の方にも、この色々な人っていうのは、当然、日本の国の中にも多様性があるというふうなお話があったと思います。

ですので、先ほど最初の事務局からの説明の中で、日本の文化みたいなものと外国の文化、とありましたが、日本の文化といっても必ずしも一律では当然ないわけですよ。例えば伝統行事と一言で言っても、例えばお正月一つとっても、南の方と北の方と違ったお祝いの仕方をするみたいなこともあったりする。それを知ってるということだって、日本国内だって必ずしも一つではないんだよっていう、これも異文化体験になるのかなというふうに思います。

もっと言うってしまうなら、同じ地域にいても、例えば異年齢ですよ。例えば小さい子と中高生、それから 30 代、40 代、それからもう少し高齢の方とかっていう形で、実は持っている背景が違う。その中でコミュニケーションをしていくっていう時には、実はその持っている背景の差を埋めるためのすり合わせをしていかないと、実はコミュニケーションってうまく成り立たないということがあると思うんですね。そういう様々な子供たちが、例えば高齢の方と一緒にお話をするような機会を持つことというの、その多様性を受け入れていくためのある種の体験というところにもつながっていくんじゃないかなと考えています。

これもすでにお話、確か柴山委員がお話したと思うんですけど、例えばその絵本を読むみたいなことっていうのは、場合によっては違った国の人がいないようなところでも、そういう園の中で読み聞かせをするというようなことで、その絵を見ながら、様々な視覚情報を得ながら異文化に触れることもできますし、もちろんお話の中身もそうかもしれません。場合によっては、例えばそれは音声データでもいいかもしれません。

例えばその一つの物語を、これも柴山委員がお話したように、複数の言語で聞きたいな体験ということで、言葉の面白さみたいなものに気づくということもあるかもしれません。特に物語の中でオノマトペみたいなものが出てくる。それが実は色々な国による特性みたいなものが現れたりなんていうようなこともあるし、外国語で聞くことによって意味そのものはわからなくても、その言葉のリズム、ライミングだとか、そういったようなものによって、言葉の楽しさみたいなものに気づくというようなこともできるのかなというふうにも思っております。

こういうふうなところで他の文化との違いに気づくということも大事なところがあると同時に、実は違いだけではなく、類似性も、実は似ているところもたくさんあるよねみたいな気づきっていう視点っていうのも、非常に大切なかなと思ってます。

ちょっといじめになる可能性の話もさっきあったと思うんですけども、いじめが起きるって、要するに自分とは違ったものを排除するっていうふうな意識の中から生まれてくることが多く、実は違うと思ってるかもしれないけど、根本のところでは一緒だねって思える力っていうのが大事だと思います。これは幼児に限らずですけど、日本社会全体の中でもっともっと受容性や寛容性みたいなものが伸びていけば、そういったいじめとかにつながるような文化もだんだん減っていくんじゃないかなんていうふうに考えております。

なので、ちょっとすいません、これ 2 番目、3 番目あたりがちょっと今ぐちゃぐちゃにもうなってしまってますけれども、ここも先ほどからあるように、東京都の中で多様性という話もありますので、その調査にあたっては、その色々な場所から取ってみて、ある特定の場所だけで決めつけるというようなことがないような形でできればかなと思っています。最後の対象年齢に関しても、色々な違いに気づけるということあると思いますけど、実際問題、色々な調査の結果というふうなものに関して得ようとするのであれば、これも 3、4、5 歳ぐらいの、いわゆる幼稚園ぐらいの年齢層のところをとりあえず対象にしてみても、そこに差異があるのかどうかというところを見ていくということで良いのではないかなと考えております。

とりあえず私の方から以上です。

(秋田座長)

藤田委員、どうもありがとうございます。それではちょっと接続の関係で順番が逆にお待ちいただきました。アブディン委員、次にいかがでございますでしょうか。

(アブディン委員)
よろしいですか。

(秋田座長)
はい、お願いいたします。

(アブディン委員)

秋田先生、よろしくお願いします。内田委員、本当に非常に私はずっとうなずきながらご発表を聞いておりました。前回参加できず申し訳ありませんけども、アブディン・モハメドと申します。

私自身がですね、まず自分の話をしますと、日本にはもう 28 年間住んでおりまして、19 歳から日本にきています。特性として、私、外国人でもありますけども、重度の視覚障害者でもありますので、先ほどの藤田委員からですね、異文化というのは必ずしも違う国籍のことだけではないということを含めて、その視点からお話したいと思います。

まず求められている視点なんですけれども、私が感じることは、子供って非常に大きな好奇心を持っています。バイデフォルトで。色々なことについて知りたい、聞きたい。ただ、残念ながらこれはこういうことを聞いてはいけないとか、そういった大人の方ですね、どんどん制限かけていくことによって、なかなか気軽に色々な聞けなくなってしまうということは、すごく私は感じています。

ある時、私は白杖持ちながら電車に乗っている時に、子供がお母さんに「この白い棒は何ですか？」って聞きました。お母さん、「だめですよ」って言うんですね。普通にこれ見えない人の白杖ですって言えばいいのになと思っていましたので、「これは私も目が見えないから、これ持てれば行きやすいですよ」と日本語で話したら、「日本人ですか？」子供の枠の中で肌の色が違うから日本人じゃないという感覚じゃなくて、もしかしたら日本人かもしれないといった考え方があるわけですね。

でも大人になってくると、これは違いますね。幼稚園あるいは学校では、どっちかっていうと常識的なことを教える。その常識の範囲が狭ければ狭いほど、なかなかグローバルな感覚であったりとか、他者に興味を持つことに対してネガティブな方向に行ってしまうんじゃないかなと思ってます。なので、幼稚園段階からですね、注目すること自体が非常に素晴らしい。好奇心が損なわれる前にですね、あるうちにですね、そういった体験をいっぱいすることは大事だと思います。

じゃあどうということ取組がいいかということなんですけど、いろいろな提案がありましたので、それに加えて、私の提案としては、子供がですね、異文化に対して、もちろん本の読み聞かせだとか絵本もいいですけども、子供自身が主人公になって体験することが重要なと思ってます。

一つの取り組みとしては、世界の各国の神話や昔話だったり、そういったものの身近な芝居をするというのはあるのかなと思ってます。やっぱり芝居をちゃんとする中で、その国の文化をですね、もちろん知りますし、自分が主人公として能動的にやらなきゃいけないということで、本当に子供も一生懸命やります。それをやる中で、例えばその言葉であったりとか、簡単に覚えたりとか、で、それを保護者の前に発表することによって成功する。その外国と関わるということは、成功体験に結びつく。そういった記憶を小さい時にすると、やっぱりグローバルな感覚というのはポジティブなものであるといったイメージが小さい時から湧いてくるんじゃないかなと私は思っています。

小さな提案ですけども、そういった取組をやってみるのもいいんじゃないかなと思っています。もちろん実現可能性の難しさはありますが、先ほど様々な委員からありました地域の大学の留学生を使えるなら、例えば芝居のところですね、神話だったりとか、文化のインプットであったり、言葉の指導だったり、そういったものもやっていけば、そのようなコラボですね。子供が小さい時にただ一方的にですね、受身的に外国の文化に触れるとかじゃなくて、自分自身が主人公になって主体的にその体験して、その成功体験をするというのは、ある意味で一つのグローバル感覚を築くための一つの土台になるのではないかなと思っています。

手短ですけど、私は以上です。

(秋田座長)

アブディン委員どうもありがとうございます。それでは続きまして、内田委員お願いいたします。

(内田委員)

はい、ありがとうございます。時間も大丈夫ですか。

(秋田座長)

大丈夫です。

(内田委員)

ありがとうございます。私は最初にプレゼンテーションをさせていただいたので、最初のどのような視点を持って取り組むかというところはお話したかなと思っているんですけども、実地調査を行うにあたってということをお話します。プレゼンテーションでも触れさせていただいたんですが、やっぱり外国の人と関わることを以外の部分での体験ということも含まれるように調査をしていただけたらいいかと思っています。違いに触れる経験ということで、それが結果的に色々な東京都内の色々な地域で、どこでもやれることにつながっていくのではないかと思います。

それから取り組みや工夫の中で、2番と3番が逆になってしまいました。すみません。2番の方の効果的に引き出すための取り組みや工夫っていう時に、ぜひ拾い上げていただきたいと思うのが、取り組みやすい切り口の事例があると、やはりまだやったことがないとか、どうやってやったかがわからないでもやりたいという先生たちとか、それから保護者の理解も得やすいと思います。私もプレゼンテーションに含めなくてちょっと反省してるんですけども、園の中にあるどんな本があるとか、地域の図書館にどんな本があるとか、それから先ほど遊びの例ですね、色々な遊びがあるとか、それから大学のお話は既に出ましたけども、近くの小学校との関わりの中で、小学校にいる色々な人、中学校、高校の子供たちとの関わりっていうこともあっていいのではないかと思います。

それから、地域の取り組みに乗っているという事例もあると思うんですね。お祭りに出ていくような、そういうイメージで。ですから、地域にあるものをうまく利用している事例も実地調査が出てくるといいというふうに思っています。

最後ですけども、対象年齢なんですけど、制度的な区切りはやはり理由があってあると思いますし、調査するときの切り口として理解されやすいということもありますので、年少前後、3歳前後で、実際幼稚園という場所にも、ちょっと今下の年齢のお子さんもうらっしゃったりすることもありますので、その辺3歳前後がイメージとしてはいいのではないかなと思います。それは2歳だったら接してはいけないということではなく、大人が働きかけている時のしやすさというところで、その辺からまず考えてみていいのではないかと思います。

私からは以上です。

(秋田座長)

内田委員どうもありがとうございます。それでは私の方からも一言申し上げさせていただきたいと思います。

今までの委員の皆様がお話くださったように、やはりまずは包括的にグローバルな感覚という、知識やスキルではなくて、感覚を培っていく。自分に誇りを持つと同時に、違う人を、先ほど藤田委員が言われましたが、違うだけではなくて、それを受け入れる寛容さであったり、「ああ、一緒なんだ」という、そういうようなことを頭でわかるよりは、体験として、感覚を通して築いていく。内田委員が築くという言葉をいろいろ使ってくださいましたが、そうした形をもって、ご説明にもありました、遊びを通してっていう面白さ、喜び、そうした楽しさというようなものを通して育てていく。一度も出てきていないのは、早期から何らかの学習をさせましょうという話は出てきていないはずでありまして、やはりその部分が重要なところなので、留意していくということが必要だと思います。

そして、グローバルというので、異文化だけではなくて、内田委員のご提案にもあった自文化、それぞれの子供たちがですけども、自文化とその世界の違う文化の同時に両方を体験をしながら誇りを持つていくということが大事で、日本の子供は日本の文化や伝統にも触れながら、じゃあでも一緒にいる違う文化の子供たちや、違ういろいろな文化背景の子はどうなんだろうということで、他文化という多様性に気づいていくことがとても重要なことになるのではないかと思います。

そのためには、先ほどから皆さん、委員の皆さんが話してくださったような様々な体験。私は結構、乳幼児、幼児は食べ物に執着するとか、敏感なので、そうした食の食育等も世界の中の色々なものを取り入れたり、東京というのは多分多様なレストランが最も多い地域ではないかと思うんですけども、そうした食の世界なども取り入れたり、それから先ほどからあったお話であったり、歌であったり、私が実感するのは踊りですね。私自身が海外の方と何か余興する時に盆踊りを入れると、皆さん一緒になって踊ってくださるみたいなのがいたり、色々な文化の体も使ったものややっていくなどが幼児期には重要な取り組みになるのかなと思いますし、読み聞かせも保育士だけではなくて、色々な文化背景をお持ちの保護者が、逆にその母語でお話を読み聞かせてくださるというようなところを見たことがあります。それがまた保護者も一緒に参加してグローバルな感覚を持っていくというようなところで大事なのではないかなというふうに思うところでもあります。

そして、その先ほどからある絵本を「環境を通して」というところで、ぜひグローバルな視点で絵本等を各

園ができるとか、貸し出しができるなどということができるといいのではないかと、つまり、イベントで1回読み聞かせてもらっただけよりは、色々な絵本があるねと、子供が日常の生活の中でグローバルな視点に触れられるような、他文化視点を取り入れた環境というものを検討いただくというようなことも重要ではないかというふうに思います。

そのために、試行実施ではもう皆様と言っていたところと同じでございますけれども、多様なところで、特に経験がないように一見見えるところでも乳幼児期からですね、こうしたグローバルな感覚を身につけるという経験はとても重要でありまして、むしろそうしたところも生かせるような地域を配慮していただいたら、施設類型も背景に入れていただいたらいいと思いますし、皆様言われたように地域のリソースとして、大学も東京の中にも様々な地域がございますので、そうしたもちろん留学生だけではなくて、大使館であったり、色々な多様な企業が、今外国籍の企業もたくさんございますから、そうしたところの方なども参画いただいた多様な形式で交流ができるというようなことがあるといいのではないかと思います。先ほど内田委員が自分の身の回りのリソースを使ってという、そういうことがグローバルな体験につながるというようなところが大事かと思います。そして、年齢や発達というところにつきましては、今まで皆さんも言われるように、本当は0歳児から色々な感覚を持っていくことは、赤ちゃんは赤ちゃんの色々な表情や文化の背景や人種の赤ちゃんの写真を見るのがとても大好きということは、ブックスタートを立ち上げた時からわかっていることでありますが、そうしたところもうまく活用していただきながらですね、色々な年齢でやっていただくのもいいんですが、指針要領等で考えて、やっぱり幼児期、もし色々なところでやるのであれば、まずは5歳とかから始まって、4、3と広くですね、色々なところでやっていただけるとよろしいのではないかというふうに思ったり、またそうでないところでも、これにオンラインであったり、そうしたものも活用していただきながらやっていくような工夫も楽しみながらとか、面白いと思えるということが重要になるかと思います。

そして最後にですね、本日の議論の中で、各委員が大変具体的なお参考の意見を出していただきましたので、それをですね、事務局においては実地調査の内容の方に盛り込んでいただいて、それを先ほどお話もありました。働き方で保育園や保育者に押し付けにならないような形でやってみたいと思えるところを取り組んでいただけるような、負担になるのではなくてということも重要なところかと思います。

それでは私の方もちょっと伸びてしまいましたけれども、これで意見は終了とさせていただきます。最後に事務局の方からご連絡をお願いいたします。

(山本部長)

はい、ありがとうございます。次回の開催につきましてですが、今4月の下旬もしくは5月の上旬を予定してございまして、具体的な日程について調整をさせていただいているところでございます。詳細につきましては、改めて後日ご連絡をさせていただきます。よろしくお願いいたします。

私から以上でございます。

(秋田座長)

ありがとうございます。本日は長時間にわたり、対面の方、オンラインの方、ご参加をありがとうございました。

以上をもちまして、会を終了したいと思います。内田委員今日にご発表いただきまして、誠にありがとうございます。委員の皆様もありがとうございます。

これで閉会とさせていただきます。ありがとうございました。